

「キリストにあって一つ」

エフェソの信徒への手紙 2 章 14～16 節

政治経済学部特任チャプレン 洛雲海

一昨年三月、新型コロナウイルス感染症がまん延する中、私は韓国から聖学院大学にやってまいりました。それまでの 22 年余りの間、私は韓国に住んでいたのです。私の生まれは東京、育ちも東京です。韓国語も分からないまま韓国に行き、生活していました。

なぜ私は韓国に行ったのでしょうか。その理由を今日は一つだけお話しします。

もともと私には、ヨーロッパかアメリカに留学したいという思いがありました。そんな私には、神学校の大学院で一緒に学ぶ親友がいました。韓国から日本に来た留学生で、すでに牧師でした。生まれた日も私と数か月しか違いません。よく議論もしましたが、たまには授業を一緒にサボって空を眺めに行ったりもしました。そんな彼が、私に向かってしばしば話すことがありました。「僕は、日本人の真の友を探している！」というのです。親友であるはずの私を前にしてそう言うのです。それじゃ、私は真の友ではないのか？彼のそのことばを聞く度に、「おまえ、何言ってんだよ」などと笑いながら軽く受け流していました。(以下、「私は韓国人の真の友になりたい」『時代のように訪れる朝を待つ』(新教出版社、2011)からの引用)

そんな彼が、ある日、突然死んでしまいました。幼い子ども二人とご夫人を残して。心臓麻痺でした。三二歳という若さでした。…彼が天に召されてからのことです。日が経つにつれ、彼の語っていた言葉が私の心の奥深い所でこだまし始めました。「僕は、日本人の真の友を探している。僕が今、日本でこうしているように、韓国に行って韓国語を学ぶような友、韓国で生活するような友、韓国語で僕と話をしてくれるような日本人の友を探している。口先だけで友だちだなんて言うのでなくて、…本当に韓国と韓国人を愛してくれるような日本人の真の友を探しているんだ！」

お互いに友と認め合っているはずの相手を前にして、彼は「真の友」を探していると私に訴えていたのです。悲しいことに、私にはその意味が全く分かっていませんでした。彼の言葉を耳では聞いていながら、真剣に受けとめようとはしていませんでした。その証拠に、彼との会話はいつまで経っても日本語でした。私は一向に彼の母国語を学ぼうとはしていませんでした。韓国語を学ぶ時間があるくらいなら、西欧神学を学ぶのに役立つと思われる他の外国語(たとえば英語とかドイツ語とかラテン語とか、聖書言語のギリシャ語とかヘブライ語とか)を学ぶことしか頭になかったのです。私は傲慢で偽善的で利己的な者でした。心には自分のことしかなくて、相手の言葉に耳を傾ける誠実さにも相手を思

いやる愛にも欠けていたのです。

しかし、その友が死んでしまいました。そしてその後、彼の言葉は、直接耳にしていたときとは比較にならない程、強く、重く、心の中に響き始めたのです。

それから三年ほど経ったとき、私は「恐れるな。韓国に行きなさい」という声を聞きました。神さまの声と信じました。それで、私は決心して日本を離れ、韓国に渡って行ったのです。韓国の人々の真の友になりたいという希望を抱いてです。私の年齢はすでに 30 代半ばとなっていました。決して若くありません。でも、私は未来に対する何の保証もないままに、ソウルにある大学で、韓国語を一から学び始めたのです、彼のあの言葉を何度も噛みしめながらです。

韓国に住んで、言葉を学ぶことによって、私はそれまでどんなに韓国の文化や韓国の人々のことを知らずに生きてきたかを思い知らされました。本当にその国の人の友になろうとするなら、その国の人の言葉を学ぶことが大切です。そうしてこそ、そこに生きる人の心の深みに触れることができます。

私たちは皆、神さまがお造りくださった人間です。使う言葉がどれほど違おうとしても、日本人も韓国人も中国人もベトナム人も西洋人も、その他どの国の人も同じ人間です。嬉しいことがあれば笑い、悲しいことがあれば泣き、頭にくることがあれば怒ります。

ところで、私は向かった先の韓国で 20 年以上暮らしてきました。たくさんの方々が、本当によくしてくださいました。韓国の人々と共に、韓国語ばかりか日本語でも礼拝をささげてきたのです。これは大変なことです。20 世紀には、帝国日本に支配された植民地時代がありました。ある人たちにとっては思い出したくもないはずの日本語でしょうに、その日本語で神さまの前に共に立ち、共に礼拝を献げることを決断してくださったのです。たとえ日韓関係がどんなに険悪な状況になっても、日本語の礼拝は変わりなく続けられました。天国(神の国)では、日本人も韓国人もありません。キリストにあっては日本人も韓国人もギリシャ人もユダヤ人もないのです。神さまの前では、どの国の人であっても上下はありませんし、キリストにあって皆一つとされます。私はそのことを韓国での礼拝で繰り返し繰り返し体験してきました。そこにはキリストにあってこそかなう和解と平和がありました。その体験を思うとき、エフェソの信徒への手紙 2:14-16 に記されていることばが、力強くわたしの心の内に響いてきます。

「キリストは、私たちの平和であり、二つのものを一つにし、ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、数々の規則から成る戒めの律法を無効とされました。こうしてキリストは、ご自分において二つのものを一人の新しい人に造り変えて、平和をもたらしてくださいました。十字架を通して二つのものを一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼしてくださいました。」

これは本当のことばです。イエス・キリストを信じる時、ここに書かれてあることが本当にそうなるので

す。キリストが平和だからです。愛だからです。キリストが十字架を通して敵意という隔ての壁を取り壊していただきました。だから、キリストにあるなら、私たちは皆一つになれますし、新しい人となれるのです。キリストにあるとき、神さまとの和解がかなえられ、人との間でも和解と平和が実現されます。逆に、キリストなくしては、どんなに努力しても、本当の和解と平和は難しいことでしょう。

しかし、キリストにあれば大丈夫。皆さん、ぜひ教会に行ってみてください。そして、外国語を学んでみてください。外国の方々が使う言葉を学んで、相手の使う言葉で話をしようとするのです。その時、新しい世界が開けていくことでしょう。イエスさまを信じる人たちの間では、韓国人も日本人もその他の外国人もありません。みなキリストの愛に感謝する人たち、天の国、神の国を待ち望む人たちです。大切なことは、神さまの前でイエス・キリストを信じること。他者との和解も真の平和もそこから始まります。信じる時、必ずやキリストにあって一つとされる喜びがもたらされることでしょう。新しい生き方、すばらしい生き方が始まるのです。

祈りましょう。

天の神さま

国を越え、民族を超え、出自を越え、言葉を越えて、

キリストにあってみな一つとなり、平和を享受する者とならせてください。

世界中から聖学院大学に集う皆さんをキリストにあって祝福してください。

イエスさまの御名によって祈ります。

アーメン

2023年4月13日 聖学院大学 全学礼拝